

<講演抄録>10.6歳から成人に至る下顎骨，上顎，頭蓋底，頸椎，舌骨，身長の成長に関する研究(第11回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	佐藤 亨至，三谷 英夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	6
号	2
ページ	138-138
発行年	1987-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/31271

症例の成績が優っていた。これは、移植床の状態が移植に影響を与えるためと考えられた。

年齢別の成績では、20代、30代の症例でも比較的良好であり、根完成歯の移植は、根未完成歯よりは劣るものの有用と思われた。

骨性癒着は、おおよそ歯槽硬線の消失と相関し、歯根膜の再生が起こらなかった部位に癒着が起こると考えられるが、特に年齢の高い症例に骨性癒着の高い傾向はなかった。これは、個体差が関係するほか、手術操作の工夫による事も大きいと考えられた。

以上、我々の経験した歯牙移植例から、移植の良否は、移植床の状態や手術手技等、移植初期における要因が大きく影響すると考えられた。今後、症例を増して、影響因子、骨性癒着の予後などについて検討して行きたい。

9. 上顎洞と顎顔面との関連について

栗田定明, 佐藤亨至, 深沢裕文, 三谷英夫(歯科矯正)

顎顔面部には、鼻上顎複合体が関与する機能空間域として、鼻腔、咽頭気道、口腔、眼窩、上顎洞等が存在するが、Mossはこれらの空間域が機能母体となっており、顎顔面部の成長発育や解剖学的構成に重要な役割を果たすと理論づけている。しかし、一般的にこれらの空間域の機能的役割を個々に区分して、それらが顎顔面部の骨格構成にどのように影響するかを把握することは困難である。そこで本研究では、レントゲン写真上で比較的境界明瞭な副鼻腔、特に上顎洞に注目し、それが鼻上顎複合体のなかでどのような位置関係を示すかについて検討し、種々の機能に関与する鼻上顎複合体の形態構成のメカニズムを知る糸口とした。

研究資料として、日本人成人女子100名(平均20歳11カ月)の側面頭部X線規格写真(セファロ)を用い、それらのセファロ透写図上で上顎洞形態を計測し主成分分析を用いて、顎顔面頭蓋部の位置と上顎洞の形態との間の関連性について検討を加えた。

その結果、以下の所見を得た。

上顎洞形態と中顔面頭蓋部の前後的な位置との間には関連性のあることが示された。また、上顎洞形態と中顔面頭蓋部の上下的な位置との間には明確な関連性は示されなかった。

10. 6歳から成人に至る下顎骨、上顎、頭蓋底、頸椎、舌骨、身長に関する研究

佐藤亨至, 三谷英夫(歯科矯正)

演者らは既に思春期後における下顎骨長と身長、手指骨長、頸椎長との各相関が思春期前に比べて低くなる傾向のあることを報告した。そこで本研究では、身長、頸椎に加えてさらに頭蓋底、上顎と舌骨と下顎骨との相関性の変化を6歳から成人に至るまで調べ、これら諸形質の相対成長について検討を加えることを目的とした。

資料は、6歳群、9歳群、12歳群、15歳群、成人群それぞれ30名の日本人女子の側面頭部X線規格写真及び身長計測値で、いずれも上・下顎骨の前後的關係が平均的な値を有するものを選択した。

方法は、側面頭部X線規格写真の透写図上で各部の線及び面積計測を行ない、各年齢群において下顎枝長(Cd-Go)、下顎骨体長(Go-Pog'), 下顎骨全体長(Cd-Gn)との相関を求めた。

結果は、下顎骨各部の長さと、上顎骨長(ANS-PNS)、上顔面高(N-ANS)、前頭蓋底長(S-N)、眼窩長(Or-Or'), 頸椎長、第1頸椎前後径(Ca-Cp)、下垂体窩側面積、身長との相関は、9歳群を最高に、以後経年的に低下する傾向が認められた。これは思春期性成長期以後の下顎骨の成長には独自性が存在し、その成長予測の難しさを示すものと考えられた。それに対し、舌骨長(Ha-Hp)との相関は経年的にむしろ高くなる傾向が認められ、舌骨成長の特徴について興味ある知見を得た。